空襲地獄の夜が明けて

小高　幸太郎
東中野一丁目

一九四五年（昭和二〇年）当時十七歳だった私は、芝区芝浦の沖電気芝浦工場に少年工として、海軍関係の通信機器の生産をしていた。軍需工場だったので軍の監視下にあり、昼夜憲兵が巡回する中での二四時間体制で、一日おきの徹夜勤務であった。朝八時から翌朝八時で、仮眠時間は午前三時から同六時迄の三時間であった。

少年工は毎日午前中、近くの沖電気青年学校で軍事教練をする。銃剣術や軍人勅諭等の教育をやらされた。学科の時間は眠くてたまらない。居眠りをすると教官のびんたが容赦なく飛んでくる。昼食の時間が待ち遠しかった。札の辻陸橋際に市営田町食堂があって、昼食は毎日ここを利用した。カレーやきめしとアサリの炊き込み飯で、一食十五銭だったか。工場付近の食堂は次々と閉店していった。工場の地下に食堂が出来、給食制になった。昼も夜も乾燥人参が半分も入った麦飯で、おかずは連日ホッケの干物である。北海道出身の少年工達はホッケを食べなかった。私は今でも時々食べるが、当時のホッケは旨くなかった。油を取ってしまったようだ。

地方出身の少年工達は、親から大豆、こんぶ、するめ等が送られて来た。豆はプレスで潰してせんべいにして食べていた。一般家庭では大豆を潰して油を絞り取った豆かすが配給になり、主食になっていた。サツマいも金時等は姿を消し、燃料となるガソリンいもが作られていた。工場で徹夜の時、夜食の煮込みうどんを食べての仮眠時間で、やっと心身共に休まる思いであった。仮眠は工場を出た川沿いにある木造二階建の寮である。窓から入るすきま風に、毛布を身に巻きつけて仮眠した。

当時は衣類も配給制で、衣料切符があっても何一つ自由に買えない程物不足である。当時、私の服装は、戦闘帽に国民服の上下、足には巻脚絆を巻き、母が作った防空頭巾を肩から下げて通勤していた。上衣の左胸には白い布に、住所、氏名、年齢、血液型を書き縫い付けてあった。頭から足迄、国防色（茶褐色）でなければいけない時代である。工場で着る作業衣は、十九年から二〇年にかけての冬はもう布製ではなく、紙紐で織った国

防色のものが支給された。油で汚れると下着迄油がしみて来た。

中年の先輩諸兄は、次々と召集され戦場へと旅立って行った。工場内も人手不足になり、残ったのは、年配者に私達少年工、そして北海道から沖縄迄、日本全国から動員された女子挺身隊（農家の娘さん達）だけになった。私と同窓の友Mさんも予科練に志願していった。明日入隊と決まった夜、Mさん宅に行き、家族と共に送別会をした。Mさんのお父さんが写してくれた写真を見ると、当時の事が甦る。

昭和十九年五月軍需会社に指定された沖電気は、同年八月、学徒勤労令、女子挺身隊勤労令が施行されて、麹町三番町にある大妻高等女学校が学校工場に指定された。

私の所属する海軍工場からも、ハンダ付等軽作業を学校へ持ち込んで教室を工場に変えていった。最初にTさんが指導員として検査課のKさんと毎日学校へ行っては、女子学生の仕上げた製品を芝浦工場へ持って来るのである。女子学生もセーラー服にモンペ姿でエプロンを付け、白い鉢巻での作業である。「東京都戦災誌」によると、米機の東京空襲は十九年十一月一日以来敗戦迄実に九四回とある。度重なる空襲に私は慣れっこになっていた。

私の家族は、両親と弟四人の七人家族で、下の弟三人は十九年八月頃の学童の集団疎開で、埼玉県奈良村、同大田村へと疎開した。家は東京駅八重洲口を出ると八重洲橋の上から見える程近く、京橋区槇町一丁目三番地に住んでいた。家の両側は空き地になっていて、片方の空き地は厚いコンクリートになっていて、鉄筋等の建築材料置き場になっていた。その下に父が作った防空壕があって、中は食料等が入れてあった。私の家と京橋昭和国民学校の間にあった隣組の人達の家は強制疎開にあたり、市外や近県へと引っ越して行き、私の家が一軒だけ残る形になった。取りこわされた跡地に母はカボチャ畠を作り、食糧難に耐えた。

空襲は日増しに激しくなり、二〇年一月二七日、五月二五日の空襲によって銀座は壊滅したのであった。徹夜勤務の翌日は、家で眠っていると空襲警報のサイレンが鳴り、起こされた。防空壕の中は荷物も入っているので狭かった。そんな日々の繰り返しであった。

三月九日は徹夜勤務の明け番だった。夕食後私は二階で蒲団にもぐった。私は死んだように眠っていた。翌十日未明の空襲警報が鳴っても夢うつつで、母が何度も起こしに来たがなかなか起きられなかった。それからどのぐらいたったのか、又母の叫び声にやっと目が開いた。「日本橋の方が燃えてるよ。早く起きて防空壕に入んな」。やっと跳び起きた。母は私が起きたのを見届けると、防空壕へ引き返した。私は着のみ着のままで寝ていたので、帽子をかぶり頭巾をかぶって二階の窓から外を見た。日本橋方面は昼間のように明るかった。階段を飛ぶように下り

た時、男の人がどなる声が聞こえた。「槇町ビルが燃えてるぞ。火を消しに行かないとこっちもやられる。男は火を消しに行け」。

槇町ビルは、八重洲通りの向う側で、日本橋区にある。私は戸口に立てかけてる鳶口を持って槇町ビルに駆けつけたが、もう火を消すどころか手の付けようもなかった。ビルの窓という窓から火の固まりが窓一杯に焔となって噴き出して、熱さで近寄ることさえ出来なかった。自分に降りかかる火の粉を払いながら、八重洲橋の下を流れる城辺川の方へ逃げ出した。川端には大勢の人が避難していた。私は顔中火傷のような熱さを感じた。そして呆然と燃え盛る街を見ていた。と又ゴーと重苦しい爆音と共にB29の爆撃が始まり、焼夷弾を雨降る如くに落としながら、東京湾方面より丸の内の方へ飛んで行った。私の頭の上にも何機か飛んで行った。

私はもう、その時は恐怖心はなかった。川淵の歩道にしゃがみ込んで焼夷弾の落ちるのを眺めていた。あっちでもこっちでも火柱が上がり、文字どおり火焔地獄となり、その時の光景は私の頭から一生消える事はないだろう。目の前の市電通りにも焼夷弾が落ち、花火のように火玉が四方八方へと飛んだ。二本のレールは炎に映り真っ赤になって見えた。槇町ビルの隣にある電気浴場に火が移り燃え出した。燃料タンクが爆発したのか、ドカンと音がして火柱が上り燃え上った。よく父に連れられて通った銭湯である。湯舟の回りに銅板が張ってあり電気が通っていて、近づくとビリビリと身に電気が伝わり、腰痛、リュウマチに効くのだそうだ。日本橋区は火の海と化した。私は両親の入っている防空壕に走った。幸い京橋側は未だ燃えていない。壕の中から父母と弟を出し、八重洲橋の上で夜が明ける迄うずくまっていた。この夜は家も壕も無事に難を逃れた。

三月十日の空襲で、京橋区は銀座、月島等十三町が被災し、日本橋区は実に四四町が被災したのである。中でも、浜町にある明治座の地下室に避難した沖電気の少年工や女子挺身隊約五〇名と町内の人々の全員が焼死した。又学校工場の大妻高等女学校も、木造講堂は灰になり、鉄筋校舎も三階以上が寄宿舎共焼き尽くされた。三月十八日の卒業式はグラウンドの焼け跡で行われている。

四月になり私はTさんと交替して大妻学校工場へ派遣され、女子学生と教室で生産に当ることになった。私は二階の焼け残った教室に泊り込む事になった。窓硝子はほとんどなく、机等も隣の教室に移し、ガランとした教室で検査課のKさんと一日交替で泊っていた。室の一角には畳が二枚並べられ、周りを雨戸で囲い、蒲団も一組学校で用意してくれた。学校長の大妻コタカ先生は母位の年齢であった。私が「小高です。よろしくお願いします」と言うと、「私の名前もコタカよ。よろしくね」と言って笑っていた顔が今でも思い出される。やさしい先生であ

った。

作業する教室は一階の正面入口の右側にあり、校長室は左側の二つ目にあった。教室には天井から電球が低く下げられ、夜でも仕事が出来るようになっていた。床には電線をはわせ、各机にはコンセントを付け、電気ゴテ、糸ハンダ、ペースト等が置いてある。生徒達も慣れない手付きで一生懸命がんばった。空襲警報が鳴ると作業を中止し地階へと避難した。

空襲が連日のようになり、生産は落ちていった。私は一人で教室に残り仕事を続け、学校にいる間一度も地階へ避難したことはなかった。夜は生徒達の作った物をまとめて、翌朝五、六人の生徒を連れて芝浦工場へ持って行った。毎夜十時頃迄残業をしていると、校長室に呼ばれ、夜食が用意され、校長先生の家族の方や宿直の先生と一緒に語らいながら一時を過ごした。煮込みうどん、すいとん等で、たまにはおしるこもごちそうになった。あの甘かった事、今でも思い出される。

五月に入り、私は簡閲点呼（徴兵検査）を受け、いつでも出征出来るよう言い渡された。いよいよ私も戦場に行く日が近いと思った。母は毎日八重洲橋に立ち、東京駅の乗降客や道行く人に千人針（さらしに赤い糸で縫い玉を縫ってもらい腹に巻いて戦場に行くと、敵の弾に当たらないと言われていた）を頼んでいたそうだ。そして五月二五日の大空襲の日、私は大妻の学校工場に泊まっていた。その夜何時頃であったろうか。空襲警報が鳴ったが、私は又かと高をくくって寝ていた。B29の何十機か何百機か飛ぶのが窓から見えた。近くの大本営からか、四方八方から高射砲の一斉射撃が始まった。寝るどころではない。耳の中がガーンと響いた。窓に近づいて空を見上げた。探照燈に照らし出されたB29が焼夷弾を落しながら、学校の上空を新宿方面に飛んで行くのがはっきりと見えた。あちこちで火柱が上がった。たちまち火の海になり、B29が三月十日より大きく見えた。高射砲が届かないのか、B29は悠然と飛んでいる。

そのうち、ものすごい音がして大きな火の塊が落ちるのが見えた。高射砲が当りB29が爆発して落ちていった。そんな光景を見ていた時間は長くはなかった。目の前の校庭に焼夷弾がバラバラ落ちたと思ったら、火柱が上った。下から先生方のどなるような声がした。私は夢中で階段をかけ降り一階の廊下に下りた。校長室の前の廊下に焼夷弾が窓から飛び込んで燃えていた。校長室の先に事務室があり、その先に地階へ降りる階段がある。反対側の校庭に面した窓と窓の間の壁に大きな配電盤があり、そのあたりが燃えていた。何人かの先生と一緒に私はバケツの水をかけ、一晩中消火に夢中だった。身体中水びたしで、煙と炎で顔や手が赤黒くはれあがり、焼け死ぬかと思った。生き地獄そのものだった。校舎の火災が消えた頃は夜も明けていた。校長先生も先生方もみんな無事だった。

私は急に家族の安否が心配になり、学校を出た。まだ燃えて

いる街の中を市ケ谷駅に急いだが、電車は停まっていた。市ケ谷駅から靖国通りを戻り、九段下を右に曲がり、竹橋から内堀づたいに東京駅に向かった。北口から八重洲口へ抜けた。東京駅も焼夷弾を受けホームの屋根は無かった。八重洲口を出て我が家の方を見た。京橋昭和小学校と木戸ビルだけが見えた。木造の人家はあとかたもなく廃墟と化し燻り、ビルだけが残った。防空壕の入口も焼けた残骸に覆われていた。小学校へ行った。講堂や教室が焼け残っていて、大勢の人が避難していた。やっと家族と会った時は、涙が止めどなく出て来て声を上げて泣いた。

私は二度も東京大空襲を体験した。今は子供三人もそれぞれ家庭を持ち、孫も四人いるが、私は体力も気力も衰えて行くのを感じる歳になった。平和に勝るものはない。二度と戦争を繰り返してはならない。

記事を正確に書く為、次の資料を参考にした。

「沖電気一〇〇年のあゆみ」
「大妻学院八十年史」
「中央区史」
「港区史」
「東京都戦災誌」